

モンゴルの学校に02年に黒板を贈り始めて目標の1200枚にあと一息。「ものをあげる」と自立を妨げると言われる。だが、豊かな国の責任として果たすべき寄付もある」と小長谷有紀さんはいう。

私が理事を務める「モンゴルパートナーシップ研究所(MoPI)」(大阪市)が、1021枚を455校に贈りました。1枚2万円のお金は個人や小学校の児童らから寄せられました。黒板には贈り主の名前を入れます。

日本の約4倍という広い国土に、約260万人しか住んでいない国です。それでも社会主義時代は、首都ウランバートルでも、遠く離れた地方でも、ものの値段も教育水準



こながや・ゆき
モンゴルに79年秋から1年留学。黒板寄付の記録集をMoPI(06・4395・2220)が発行。

途上国支援

も同じでした。

このモンゴルの社会主義が、89年のベルリンの壁崩壊で揺らぎ、90年に一党独裁を放棄、市場経済化と民主化が進められました。これ以降、遊牧を可能にした広さがコストに化けました。都市から離れると、ものの値段が上がるのです。このコストを嫌ったこともあって、人口の4割が首都に集中しています。地方はスカスカです。教育も、地方は置き去りに

国立民族学博物館教授

小長谷 有紀さん

されています。私たちは、自分たちでできることとして黒板の寄付を選びました。多くの学校で黒板をつぎはぎして何十年も使っているのを見たからです。寄付とするのは、教育がそもそも「持ち出し」の世界だからです。子ども自身からお金を取ることはできませんから。教育は、次世代への投資であり、富の再分配を可能にするものです。地方の子どもたちが教育を受け、技術を身につけ、大臣など輩出しなければ、格差は開くばかりです。

今の世に豊かな地域があるのは、富を偏らせて、豊かでない地域をつくったからです。教育一つとっても公平ではなく、能力にかかわらず富が偏る仕組みにされています。

満足に食べられない途上国の人たちがものをつくってくれて、先進国の人々が豊かに食べている。格差や貧困は日本でも課題ですが、豊かな人には、自分を支えてくれる人への責任がある。この責任を引き受けてこそ公正な態度といえます。

モンゴルの先生や子どもたちは「贈ってくれた人に、ここを訪ねてほしいと伝えて」と私に言います。ものをもらった負い目が感じられないのは、黒板が次世代のための公共財だからでしょう。将来の実りを楽しみにする気持ちが互いに同じだからでしょう。贈った黒板を見にモンゴルを訪ねる人もいます。出会いはきつと、未来を変えます。(インタビュー・山本博之)

視点

関西スクエアから

次世代へ豊かな国の責任

「朝日21関西スクエア」は、関西からのメッセージ発信を目指し、各界で活躍する方々の参加を得て98年に発足しました。当欄で会員の方々へのインタビューや寄稿を紹介します。ご意見は事務局(square.k@asahi.com)まで。